



ほうせきのな
るき

ぶん：しきのそらら
え：ゆき



とある貧しい農村に、見知らぬ旅の仙人がやってきました。

ものはあまり持っていないし、質素な格好をしていましたが、いつも笑顔でにこにこ。

その仙人は、村の人にさまざまな楽しいお話を聞かせました。

そして、豊かになるいろいろな方法を教えてくれました。

「いつも気分よくしていなさいよ。」

「きれいでうれしい言葉をしっかり使っていると豊かになるよ。」

村の人たちの中には、

「へえ、楽しい話もあるもんだ。ほんまかいなあ」と、興味津々でにその話を聞き入る人もいれば、

「はあ、そんならでお金持ちになれたら苦労はせんわ」と、難しい顔でいぶかしげに聞く人もいました。



そうして7週間がたちました。

「本当に長いことお世話になったねえ。ありがとう、ありがとう。」

さて、それでは私はそろそろこの村を去りたいと思います。」

一番、その仙人の近くにおいてお話を聞いていた一郎が言いました。

「いえいえ、こちらこそ本当にありがとうございました。」

寂しくなりますが、

仙人様、あなたがいなくなってからも、あなたの言いつけをしっかり守りますけえ。」

周りで話を聞いていた、次郎が言いました。

「本当に楽しいひと時を過ごさせてもらいましたわ。

そこまで言うなら、ためしに、あなたのいうことをやってみようかいな。」

その遠くで、その仙人のお話を聞いていた三郎がいました。

「仙人様、ありがとうございました。

とてもいい話を聞いてうれしかったです。

また、ぜひ来てください。私たちを励ましてくだせえ。」

残りの人は口々に言いました。

「それよりか、仙人っちゅうくらいだから、なんかねえ、

いまいちよくわからんそういう一銭にもならん話をされるよかはねえ、

食べ物なり、お金なりええもんを仙術で出せん買ったもんかいねえ・・・。」

「それでは、」

仙人が口を開きました。

「別れる際にね、この村のみんなにプレゼントがあります。」

村中の人々は、

「やったああ！」と大喜び。

「宝石」

「ええ！本当かいな！そりゃすごいべ！！」

「・・・のなる木」

ここまでくると、もう、信じられないというような反応と、うれしすぎて天にも昇るような人たちが騒ぎ立てました。

「本当ですよ。」

では、いる人。」

村のすべての人が、まっすぐに手を挙げました。

「焦らない、焦らない。

しっかり全員分のはあるから。」

村中の人たちが、しんしんと見入る中、

仙人は、小さな手のひらほどの袋を懐から取り出しました。



そして、その袋の中から、いくつものキラキラと輝く種を手のひらに開けて言いました。

その種は、ほかのどんな種よりも小さい、ゴマよりも小さく、まるで砂粒に近く見えないくらいのものでした。

けれども、たしかにほのかに光を放っていました。

「さあ、これが、宝石のなる木の種だよ。」

そこに、喜びの声はありませんでした。

「はあ、こんな見えないようなものが」という驚きと、

「なんだあ、期待させておいて」というため息と、両方の声が上がりました。

村人の何十人かは、受け取らずに帰っていきました。

あとの村人は、「まあ、一応」とその小さいけれども輝く粒を一粒ずつもらってそれぞれ家に帰っていきました。

仙人がその村から立ち去ってから、

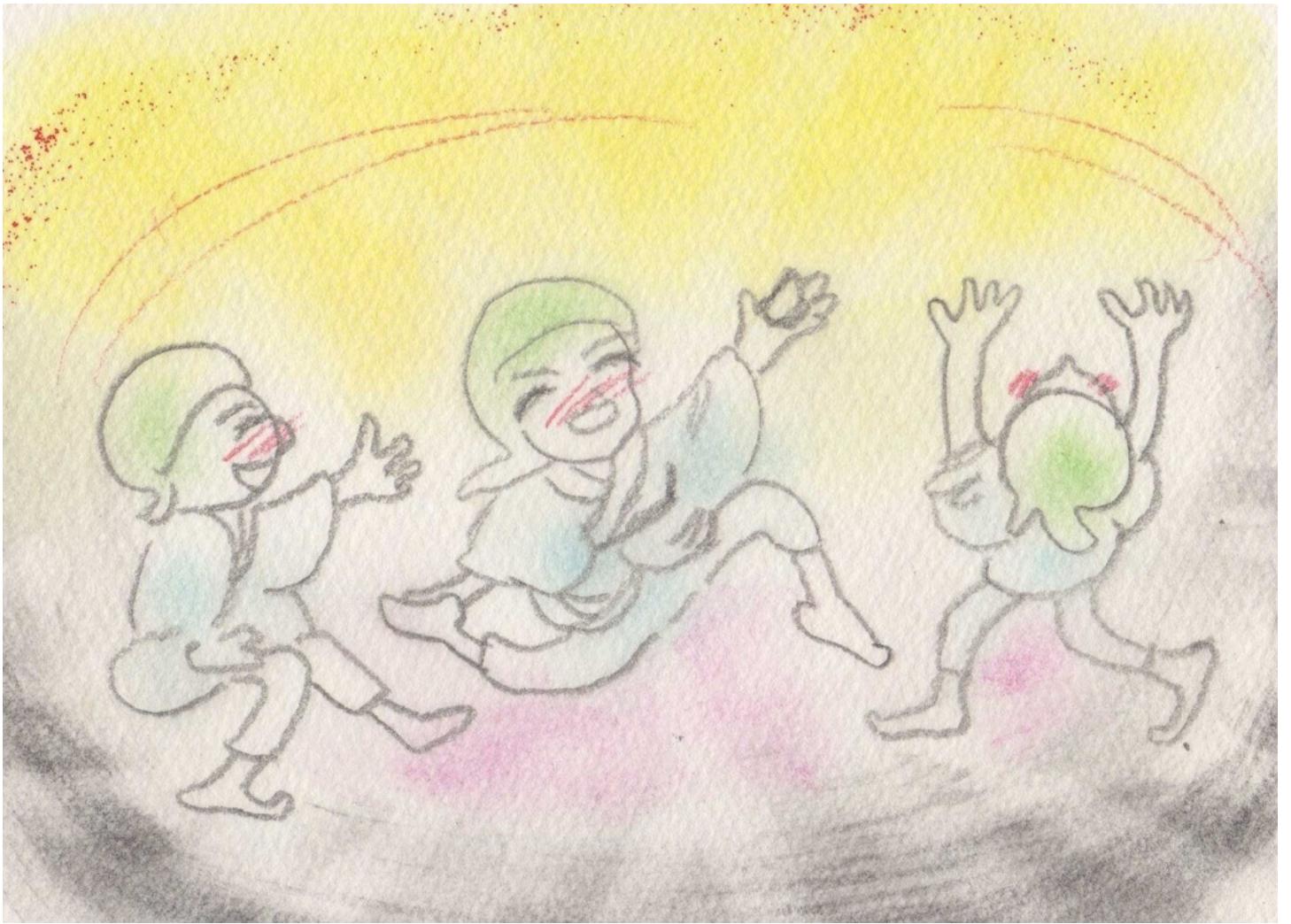
多くのその光の粒をもらった村人は、その粒のことを忘れるか、

あるいは、商人に売ってすぐお金にしてみました。

多くの村人は、そのことを知り、われさきにと、その光の粒をお金にかえて喜びましたが、

一週間もしないうちに使い切ってしまう、

「ああ、よかった。得した。」と喜んだはいいですが、それっきりでした。



さて、仙人の話を少しは聞いていた三郎は

ほかの村人とは違って、光の粒を植えました。

一週間しないうちに、小さな芽が出てきました。

「やったぞ」と思ったのですが、ほかの村人がその得たお金でど
んちゃん騒ぎをしているのを見て、「そっちの方がよかったかな
」なんて思いました。

そのうち、三郎は、仙人のいいお話のことも忘れて、そして、せ
っかく芽を出した種も、雑草に囲われて、見分けがつかないよう
になってしまいました。

三郎は、しばらくして、宝石がなる木の光の粒のことを完全に忘

れ去ってしまいました。

さて、周りで話をきいていた次郎も、三郎と同じようにしっかりと光の粒を土に植えて、同じように小さな芽が出ました。

次郎は、しばらく、一生懸命水遣りをしていました。

すると、どんどん育ってきて、それなりの植物に成長してきたではありませんか。

「いつ、この木が育って、宝石をつけるのだろうか。」

次郎は自信満々で水遣りをしていました。

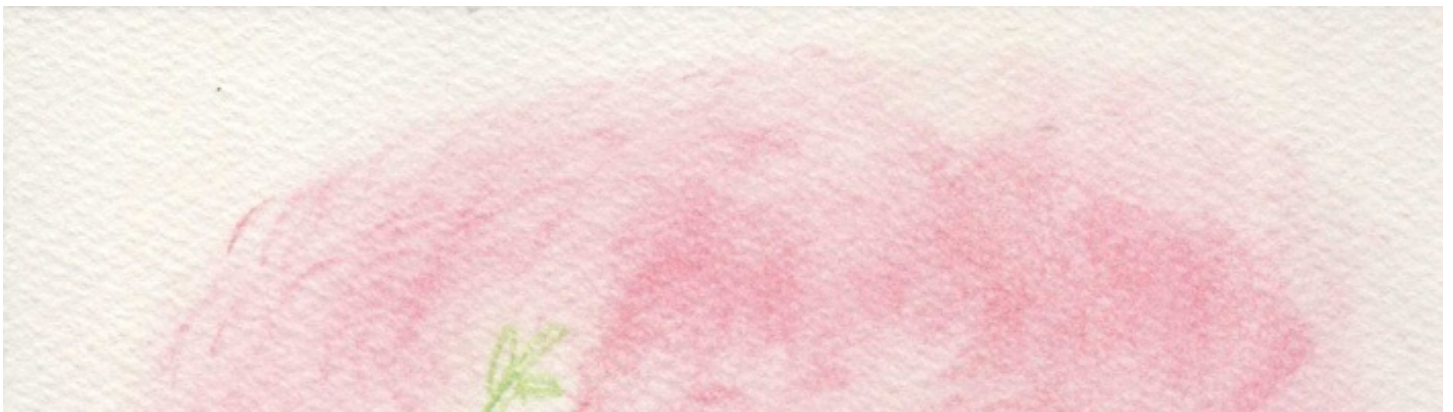
ところが、隣から、別の村人たちが、「次郎さんや、もっと手っ取り早く稼ぐ方法を見出したしましたぜ。さあ、こっちおいで、おいで。」と、別の種や肥料を次郎に渡して植えるように言います。

「それもいいかな」と、その種と肥料を植えたらどうでしょう。

あっという間に、芽が出て植物は成長して、儲かるようになりました。

しかし、

あっという間に、土は栄養を失い、別のトゲトゲした草が茂ってきて、宝石の木の手入れが難しくなってきました。





そこに、周りの村人たちが言います。

「宝石のなる木なんて嘘だべ嘘だべ。」

誰かほかに、宝石なんぞつけた奴がこの村におるかいね。おらんでしょうが。

バカ正直に、宝石のなる木なんて育てとる奴はお前と一郎くらいじゃ。その木はほっとかれたがええど。」

そうって、次郎を冷やかすものですから、いよいよ次郎も折れて、

「ああ、そうかもしれんなあ。諦めるか。」と、

その木の世話をやめて、別の新しい植物を植えて育てるようになりました。

さて、

最後に、仙人の話が一番よくきいていた一郎ですが、

こちらも、宝石の種を植え、芽が出て、順調に育ちました。

村人が、誘ってきます。「一郎さんや、この種や肥料、試してみ
てはどうかね。」

収穫もありましたが、茨も生えてきました。

それでも、一郎は、茨をせっせと取り除き、肥料も使わないで、

宝石の木をしっかりと世話し続けました。

村人が冷やかしてきます。

「宝石がなるとか、一郎さんやお前は本気で信じておるのかね。

この村では、もう、三郎も次郎も、そんな木は育てるのをやめ
ちまったよ。

そんなバカなことをやっておるのは、たった一人、お前さんだ
けだ。」



一郎は、そんな声には耳も傾けず、仙人の言われたことを思い返して、笑われながらもその木を育て続けました。

こうしていよいよ長く、寒い冬が訪れました。

村人は皆、わずかな作物で冬をしのぎました。

冬の寒さと厳しさは、一郎にも次郎にも三郎にも、すべての村人

に同じく訪れました。



さて、そうして、春が来ました。

どうでしょう。

そこには、驚くべき光景が一郎の畑に広がっていました。



一郎の家を覆うほどのおおきな木が、すべての枝という枝にまばゆく輝かんばかりの宝石をつけているではありませんか。

その輝きは一郎の家や周りを照らしてまるで宮殿のようになっていました。

地面には、零れ落ちた宝石が散らばるまでです。

一郎ひとりのおかげで、その村全体はたいそう栄え豊かになりました。

村人は、こぞってそれを見て、うれしさと、悔しさと入りまじった、とても複雑な気持ちでした。

「ああ、おれもあの種を育てることさえしていれば、簡単に一郎のようになれたのに。」

とうらやましがり、悔しがりましたが、

もはや覆水盆に返らず、です。

さて、来年も仙人は来るでしょうか。

そして、もし、光の粒を貰ったとしても、次の収穫まで一年待たなければなりませんよ。

あなたのもとにも、

いつどこにその仙人がきて、どんな形で、光の粒をくれるかはわかりませんよ。

そのときに、あなたはどうしますか。

◆おしまい◆

わかる人にはわかったと思いますが、

このおはなしのモデルは、

『新約聖書』の「マルコによる福音書」の4章の「種まく人」のおはなし。

四国遍路の最中にふと、頭に浮かんできて、あっというまに話が完成し、ノートにメモしておいたものを、

かえってすぐにパソコンに打ちこんだものです。

私は、学校と塾で先生をしていたのですが、

「幸せになるために一番大切なこと」というのを、
あの手この手でなんとか生徒たちに伝えようとしていました。

幸せになること、
人生の正しい成功には、
必ず法則があります。

そしてそれは、
世の中で言われる「多数派」のいうことや「常識」といわれることとは、違っていることが多い
のです。

その法則は確かに正しく、
誰でも実行することはでき、また、必ず実行すれば幸せになれるという確実なものなのですが、
どこかで、人は「思い煩い」にとらわれて、
せっかくの、「必ず誰でも幸せになれる道」を放棄してしまいがちなのです。

教え子たちを見ていて、

やはり、子どもたちは、聖書の言うように、あるいは、この物語にあるように、4種類の人間に分かれます。

1. 話を聞かない、耳に届かない多数派。
2. 一応「いい話」として聞いて終わってしまうだけの多数派。
3. いい話を聞いたら「しぶしぶやってみる」けれど、うまくないことがあるとやめてしまう人。
4. いい話を聞いたら、即実行して、困難があってもやり遂げて、大成功するわずかな人。

幸せの道を歩むうえで一番大切なのは、

心とか、魂とか、愛とかいう、

見えないもの、物質的に確認できないものの力をしっかり信じるということにほかなりません。

それを信じて行動し続けることは、
いつでも困難や誘惑を伴いますが、
「最後まで耐え忍ぶものは救われる」のです。

でも、やっぱり、みんなには幸せになってほしいよね。

本当の意味でね。

あなたは、この物語でどの人間になろうと思いますか。

このお話をブログ上で発表した後に、Yukiさんが、「イラストを描かせてください」といううれしい申し出をしてくださり、こんな素敵な挿絵を描いていただきました。

まるで、このおはなしのように枯れ木に花が咲いたかのように、この絵本はものすごい「宝石」をつけてくれました。

うれしいコラボレーションに、本当に心から感謝です！

2014. 10. 25

色野そらら

宝石のなる木

<http://p.booklog.jp/book/91410>

著者：色野そらら

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yu-a88/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/91410>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/91410>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ